

司書課程で出会った言葉

赤 沼 知 里

同志社の司書課程では故森耕一先生の図書館学特論がまず思い出されます。先生は新町校舎の教室でノートを広げ、開口一番、レイ・ブラッドベリのSF『華氏451度』の紹介をされました。この作品は現代文明批判の書とされますが、著者は「本を燃やす連中が大嫌いで、図書館が大好き」という気持ちで書いたと『ブラッドベリ 自作を語る』という本にありました。この本に象徴されるように、図書館に対する先生の思いが感じられる講義でした。

図書館現場演習では滋賀県立図書館にお世話になりました。『われらの図書館』（前川恒雄著 筑摩書房）の出版された翌年のことです。演習の前に館長室に伺うと、前川館長は、「司書に必要なのは教養です。」と一言おっしゃいましたが、これも忘れられない思い出です。

卒業後は司書課程研究室での勉強会、千葉県に就職してからは、司書課程の皆さんが図書館見学ツアーに上京された際の見学や懇親会に、ご一緒させて頂きました。ある年の懇親会で、確か日外アソシエーツの石井紀子さんが「その大学の評判が悪くなるから、就職してから10年は辞めてはいけない」とスピーチの中でお話しになったことがありました。私の周りでも心身を病んだり、辞める人も少なくなかったのですが、この言葉を聞き、10年はここで頑張ろうと思いました。また、日本図書館協会、図書館問題研究会、日本図書館研究会に入会していますが、これも友人から「卒業時にこの3団体に入会するようにと言われた」と聞いたのがきっかけでした。

さて、現在勤務する図書館で、図書館実習や職場体験などで学生さんたちに接する機会があります。同志社の実習の手引きには「大学の授業がそのまま現場で通用することはない、大学では図書館の理念や基礎をしっかり学んで欲しい」という一文がありました。それで、実習にあたる時はいつもこの手引きを思い出し、実習内容が作業をこなすことに偏らないよう心がけています。

今後の司書課程への期待としては、社会人のための専門職大学院を挙げたいと思います。残念ながら司書資格は図書館で働くためのパスポートとは言えない状況です。周知のとおり図書館は官製ワーキングプアの間とも言われ、正規職員は現場を回すことで精

一杯です。しかし現場でいくら経験を積んでも、それを言葉にしなければそこで得た知見は広まりませんし、外部に向かっても図書館や司書の必要性を説明できません。大学院でなくてもよいのですが、E-ラーニングなどで論文指導やスキルアップの講座があると、一人職場や職種、遠隔地、子育て、介護、研修にかかる費用など様々な理由で研修に出られない人の継続教育の場になると思います。

私の個人的な体験を書いてまいりましたが、折にふれ先生や先輩方から頂いたこれらの言葉に支えられ、私の図書館員生活があるといっても過言ではありません。特に渡辺先生には、私が教育学専攻でありながらゼミは図書館学を専攻しなかったにも関わらず、いつも温かく迎えて頂きました。同志社の校風なのでしょうか、周りを見てもこの様にアフターケアの充実している司書課程は少ないようです。司書課程資料室を支えて下さるボランティアの方にもお礼申し上げます。同志社大学司書課程は、同窓生が集い人脈の広がる場、また英気を養って現場へ送り出してくれる存在、文字どおりの母校です。

(あかぬま ちさと。千葉県立中央図書館)

司書課程受講の思い出とその後の図書館

荒 岡 興太郎

私が同志社の司書課程で学んだのは1967年のことである。当時私は大学院の法学研究科を修了していたが、定職がなく、女子高の非常勤講師をしていた。ところがその女子高の上に短期大学を作るという計画があり、その図書館の仕事をやってくれないか、というお誘いが来た。私は喜んでその仕事をお受けしたが、司書の資格を持っていない。そこで同志社大学の司書課程の事務局に飛んで行き受講させてほしいとお願いしたが、1年では資格は取れないという。1968年度に開校するのでどうしても1年で取りたいと言っても規則がそうなっていると言って取らしてくれない。そこで当時の司書課程の責任者であった吉田貞夫教授に直接お会いして、事情を説明してどうしても1年で資格を取りたいとお頼みしたら、しょうがないなあ、と言われて1年で取らしてもらった。当時はまだ例外も認めてくれる余裕があった時代であった。

受講中図書館学について感じたことだが、この学問は背景的な教養と非常に技術的なものがコンバインされた学問だと感じた。目録や分類は余りにも技術的で興味がわいて

こない。しかし、これらが本の整理には重要なことであるという認識はすぐに理解できた。短大の約一万冊の図書の整理を受講と同時にやっていたからだと思う。このように学びながら実践するというのが図書館学にとっていかに重要かということを経験させてもらった。

このようにして不完全ながらも短大図書館が生まれ、10年間実務を担当した。しかしその間も、日本の図書館はすべて同じような仕事をしていることに疑問を感じた。本を購入してカードを作る。そのカードは1館でしか使えない。仕事の重複を省けないかと思っていたら、国立国会図書館が印刷カードを発行頒布しだした。これだと思い利用したが、何しろ発効が遅い。新刊図書を購入してから1年後にカードが送られてくる場合もある。これでは本を整理してすぐにラックに載せることが出来ないのでやめることにした。

1977年6月にアメリカの図書館を見学するツアーが日本図書館協会企画で行われ、それに私も参加した。この旅行によりアメリカの図書館のすばらしさを知らされたが、ここでは機械化（コンピュータ化）だけについて述べる。アメリカでは、もうこの時点で、すでに個別図書館の目録から OCLC という中央総合目録を作成していた。これだと思ったが、まだ日本ではコンピュータが図書館に導入されていない。果たしてこのような中央総合目録が日本ではいつ実現するのだろうと思った。ところが、意外に早く日本にも学術情報センターが出来、1980年代の終わりには、わが大学（短大から昇格）図書館もこれに参加して個別図書館目録を卒業できたのは意外であった。

日本図書館史の上で、個別図書館の手書きカードの時代から現在のコンピュータによる中央総合目録までを経験させてもらったのは同志社の司書課程で学んだおかげであったと思っている。

(あらおか こうたろう。京都精華大学名誉教授)

『同志社大学図書館学年報』と私

安藤友張

私が図書館の世界に入ったのは1991年であった。私立の短期大学図書館・大学図書館勤務を経て、現在は九州の私立大学の司書課程の教員として司書養成に従事している。

1994年ごろ、渡辺信一先生に『同志社大学図書館学年報』のバックナンバーをすべて送って下さい」というお願いをしたところ、先生は欠号を除き、すぐに私に送って下さった。バックナンバーのすべての掲載記事・論文を読み、母校の司書課程の歴史を知り、同時にライブラリシップについて学んだ。数多くの先輩・後輩のみなさんが、日本、そして海外の図書館界で活躍されていることを改めて認識した。

1990年代後半、司書として図書館現場で働いているうちに、徐々に「大学の司書課程で図書館情報学を教えたい。司書養成に従事したい」という気持ちが強くなってきた。大学教員になるためには、当然研究業績が必要となる。査読付の学術雑誌に論文を投稿し、受理されないと学界（学会）で認知されない。さらに、大学教員として採用されるためには、論文の質も問われるが、同時に量（論文数）も必要となる（近年では、博士の学位取得者でないと採用されないケースが多い）。当時、私立の短期大学図書館に勤務していたが、勤務先の短大が発行していた研究紀要の場合、私には投稿資格がなかった。しかし、幸いにも、全国私立短期大学図書館協議会が発行する『短期大学図書館研究』への投稿資格があったので積極的に投稿した。その他、同志社大学司書課程が編集・発行する『同志社大学図書館学年報』（別冊の『同志社図書館情報学』も含む）にも何度も投稿させていただいた。拙稿を掲載して下さった当時の同志社大学司書課程の先生方に深く感謝申し上げたい。論文発表の場を与えて下さり、本当に有り難く思っている。『同志社図書館情報学』に掲載予定の論文の英文抄録作成においては、ご多忙な最中、渡辺先生がチェックをして下さった。「教員採用人事のときは、業績審査が厳しいので、細かな点にも注意するように」という趣旨のご助言を渡辺先生から受けた。私にとって、誠に貴重なアドバイスであった。研究職をめざす者としての心得を教えていただいた。様々なジャーナルに論文を投稿し、研究業績を積み重ねることができ、2006年4月、公募人事によって現在の勤務先に教員として採用される幸運に恵まれたのである。

全国の大学には、数多くの司書課程が設置されているが、同志社大学のように、『同志社大学図書館学年報』『同志社図書館情報学』という2種類の逐次刊行物を発行している大学は数少ない（あくまでも管見）。現在の私の勤務先もそうであるが、司書課程に予算が全くつかないという場合がある。そのため、『同志社大学図書館学年報』のような、司書課程担当教員の教育・研究活動を定期的かつ詳細に報告できる出版物を発行できない大学・短大も存在する。

機関レポジトリとして、近年、『同志社大学図書館学年報』『同志社図書館情報学』のバックナンバーが電子化され、ウェブ上で公開されている。同志社関係者のみならず、数多くの方々に同誌が広く読まれることを心から願っている。

（あんどう ともはる。九州国際大学経済学部准教授）

図書館実習と私

家 城 清 美

学生だった頃、大学図書館で働きたいと思っていたので、同志社大学の図書館で実習させていただいた。実習業務の一つに、図書館の所蔵となる図書を分類しその図書の目録カードを作成し排列するというのがあった。司書になれるかどうかわからない実習生の目録を、専門の方が作成されたものと同じ目録ケースに排列させていただき、利用者が私のカード目録を引いて資料と出会うかもしれないと思ったとき、なぜかとても感動し、寛容な大学のスタッフの方に感謝したのを今でも覚えている。また、雑誌記事索引は当時手作りで、雑誌の目次からファイル資料を作成したように記憶している。この経験は、卒業論文に取りかかるとき、必要とする資料を入手するのに雑誌記事索引を利用するということを知り多に役立った。今のようにOPAC検索などが無い時代、このような実習を経験していなければ、資料の所在を知ることは難しかったと思う。

卒業後、私は同志社女子中学高等学校の図書館に35年間務めることになった。在職中の2000年度から同志社大学の図書館実習生を引き受けることになった。まず、実習生にチームを作らせ、実習の一部はそのチームで協力しておこなうことにした。最終日にはそれぞれのチームが課題についての発表やそれに伴う製作品をどのように完成したかを説明をすることにしてた。館種が違っても、図書館業務はコミュニケーションが大切であることを理解できればとグループワークを多くした。カウンター業務や図書館での授業中のフロアワークなどを通じて利用者である生徒とコミュニケーションをとるようにした。しかし、5日間の実習期間中にたくさんの課題があるので、その業務をこなしながら生徒と会話をするゆとりのない実習生も多くいた。授業で生徒がどのように図書館資料を活用しているかを観察し、その活用をもとに生徒がどのように発表しているか、教科担任に依頼して授業見学も実習の中に入れた。授業で図書館を利用する教員のレクチャーも取り入れた。図書館のスタッフ会議にも参加し、どのように図書館を運営しているかを垣間見ることや、生徒の督促状作成などにも関わってもらった。いずれの図書館でもおこなっている業務を一通り経験できたと思う。一方で学校図書館は特殊な図書館でもある。利用者はある程度限定されているし、学校教育の目的に沿う活動や支援をおこなうので、レファレンスの解答の仕方にしても、他の図書館の解答方法を異なるところがある。つまり、解答そのものは教えないで、解答を導き出せるような考え方や資料を提供するにとどまる場合も多い。公立図書館を目指す実習生には戸惑いがあっ

たかもしれない。しかし、授業と密着している学校図書館や司書教諭の役割を気付く実習生も多かった。

実習生だった私が、実習生を指導する立場になるとは想像できるものではなかった。受け持った実習生の中で幾人かは実習ノートに、自分の受け入れた図書を蔵書として排架できる喜び、入力データを OPAC の 1 データとして搭載されたことの感動と感謝を記していた。時を経ても、同じことに感動する人が存在することに私は嬉しくなった。

渡辺先生から図書館関係の様々な講演のお誘いを受け、国内外のいろいろな講演を聞くことができ、刺激を受け、自己研鑽することができたことを感謝している。時代は変わっても同志社大学司書課程に栄えあることを切に祈っている。

(いえき きよみ。元同志社女子中学高等学校司書教諭)

私の図書館人生

伊藤 昭 治

私が図書館員になったのは昭和33年です。資格は同志社で習得しましたが、講義内容は何も覚えていません。出席してさえいれば資格が取れるといった気持で、聴講してただけだったからでしょう。図書館の勉強は就職してから必要に迫られてでした。

就職と同時に上司から日本図書館研究会に半ば強制的に入会させられたが、難しすぎて退会しました。というのも、当時の図書館学の論文は外国事情の紹介が多く、直接実務には役に立ちませんでした。私が図書館学に興味を持つようになったのは、こうすればもっと利用が伸びるのと思った実務上の疑問からでした。その後いい指導者（志智嘉九郎、山下栄）に恵まれ論文を書くようになりました。随分書きましたがすべて現場からの図書館学でした。

私が司書課程で教えるようになったのは志智嘉九郎さんが大学で図書館学を教えるようになってからです。休館日に非常勤で来るように言われました。受講生の中に聾の学生がおり、はじめて障害者の問題も学びました。その後いろいろな大学で教えるようになりました、夏休みの集中講義や司書講習などを入れると15大学にもなります。教えるのが好きだったわけではありません。頼まれると断りきれなく、「誰か後任が見つかるまで」と、引き受けたものばかりです。

図書館に勤める者として、当時から気にしていたことは、大学では「学」であっても役に立たない机上論を教えるのではなく、現場で役に立つ理論を教えてほしかったことです。長く日本図書館協会の図書館政策特別委員会の委員をし『公立図書館の任務と目標』の作成に携わってきただけに、ここに書いた公立図書館の任務と目標は、どの教科であっても教えてほしかったことでした。

そうした考えがあったため、私はどの教科でも、この分野についてのマスコミのおかしな論調や、現場を知らない研究者の机上論的な主張を批判的に力説して教えました。受講生は他の講義と比較して戸惑ったようでしたが、共感し、公共図書館を希望し、就職相談に来る学生も多くいました。

図書館の役割とか使命感を習得していると思われたのであろうか、面接者に気に入られ、多くの学生が図書館に採用されました。今でも近況を知らせて来るのは、こうして就職した学生です。私の古希記念論集にも何人かの同志社の受講生が寄稿してくれていますが、みんないい図書館員になっているようで、うれしく思っています。

同志社に講義に行くようになったのは、渡辺信一先生の依頼ですが、ほぼ10年間、時期によっては2部までも担当しました。講義を一番よく聞いてくれたのは同志社の学生でした。質問や相談も多く、レポートなどは実にも優れたものがありました。なかには、今でも捨てきれず残しているものがある。

昨年あるグループの依頼で私の図書館人生を書かされたが（『現場からの図書館学—私の図書館人生を顧みて—』である）、振り返ってみると、いい先輩、友人に恵まれ、いい図書館人生を送れたことにうれしく思っています。

（いとう しょうじ。元茨木中央図書館長、元阪南大学教授）

司書として学び続けること

井上靖代

残念ながら司書課程で学んだことはあまり覚えていない。

青木先生の図書館史のクラスで配布された青焼きの資料と分類目録法での講義ノートは残してあるので、どうやら少しは勉強したらしい。授業内容はさっぱり覚えていない。覚えているのは渡辺先生の学校図書館のクラスで映像を見たような気がするのと、どの

クラスだったか司書課程なのになぜか英文翻訳ばかりしたのと、森先生にどうせ司書にならんだろう、せめて静かに授業を聞け！と叱られたくらいである。それが悔しくて司書の採用試験を受けまくり堺市の司書に採用されたので、森先生に煽られたのだけだったかもしれない。やっぱり何だか悔しい。

図書館実習は同志社大学図書館だったのだが、すでにそこでバイトしていたので感動も何もなかった。ただ、一緒に実習を受けた受講者に丸善の社員の方がおられて、書店の人も図書館学を勉強するのだと感心したおぼえがある。書店で働きながら司書の勉強をする人は今もおられるのだろうか。

市立図書館の現場で働くつもりだったのが配属先は議会図書室だった。議員資産公開の場となるべく議会図書室が設定されたので司書を配置となったらしい。行政の中核の場でそれはそれで学ぶことは多かったのだが、図書館学については誰も先輩がいないのでフラストレーションはたまる一方だった。天満塾（枚方市立図書館館長だった天満先生が主催の図書館員のための夜間勉強会）にも参加したが、やはり図書館で働きたかった。だが、図書館員が諾といわない限り交換異動はないといわれ、図書館学をもっと学んで転職しようと思い、ボストンに留学することにした。シモンズ・カレッジである。

森先生のアメリカ公共図書館史のクラスでさんざんボストン図書館の話聞いたことも影響していたのかもしれない。図書館活動の大御所メルビル・デューイが働いていたアーモスト大学に新島襄が学んでいたことを知ったことも関係しているかもしれない。地元の姉妹都市がボストン近郊にあったこともある。留学先が図書館学とともに児童文学大学院があり、児童図書館員養成では全米トップレベルだったこともある。

私が学んだ頃には司書課程では「青少年と読書と資料」という選択科目しかなく、受講したはずだが内容はまったく覚えていない。公共図書館では必ず子どもへのサービス活動が必要なのに、不十分な状況だったのである。それは現在も変わっていない。シモンズ図書館学大学院では児童図書館に関する科目を受講したが、レファレンス・サービスと図書館の自由に関する科目と同じくらい大変だった。それでも不十分で、卒業したあとコロンビア大学にYAサービスのクラスを数年かけて聴講しに行った。また、ニューイングランド児童文学会の夏季集中ワークショップを20年以上毎年夏受講しに行った。それでも十分ではない。同志社大学の司書課程に求めるのは公共図書館現場に必須の子どもやYA向けの資料選択やサービス活動を学ぶ科目をもっと増やしてほしいことである。学校図書館にも役立つ内容のはずである。特色ある司書養成教育を行ってほしいと切に求める。

(いのうえ やすよ。獨協大学経済学部)

類例のないネットワーク

岩 崎 弥太郎

私が全国学校図書館協議会事務局に入局した1999年は、ちょうど1997年の学校図書館法改正による司書教諭の必置、学習指導要領改訂による学校図書館活用がにわかに注目されつつある時期でした。

それまでは、利用者の要求にこたえることが図書館利用を増やし、図書館を発展させるという、明快かつインパクトのある伊藤昭治先生の講義をきっかけに、図書館で働くことを志望していたこともあり、入局前後にそれまでの図書館観を学校図書館に結び付けるのに苦労したことを覚えています。

しかし実際には、単行書の刊行や、現在のメインの仕事である月刊誌『学校図書館』の編集では、下調べとして文献等に当たることは必須の作業であり、こういう作業が苦もなく行えるのは、当時の司書課程の厳しい授業で参考図書を片っ端から調べていったり、レファレンス演習で目的の資料を探し出したりしたことによるものだと思います。

同志社の司書課程は、さまざまな館種や図書館関連機関・企業へ人材を輩出し、また、それらに所属する人々が一堂に集まる機会を設けていることはとても特徴的だと思います。他大学の司書課程で同様のことを行っているところは少ないと聞きますし、編集の仕事をしていると多くの人との関わりの中で、同志社の司書課程が話題になることがあり、他大学の先生がたに関心を持たれていることがよくわかります。また、原稿執筆を依頼した先生が、実は同志社の司書課程出身であることが、後でわかったりしたこともあります。

同志社の司書課程のネットワークはとても意義のあることだと思います。60周年を機に、卒業生としてあらためて再認識し、大切にしていきたいです。

(いわさき やたろう。全国学校図書館協議会編集部主任)

同志社卒業後に得た司書課程との縁に感謝

魚 住 英 子

同志社大学司書課程の正式発足60周年を心よりお祝い申し上げます。

この長い歴史と伝統を誇る司書課程の一員として、この記念すべき年を諸先生方ならびに多くの同窓の方々と共にお祝いすることができ、光栄に存じます。

私は、現在関西学院大学図書館に勤務し、レファレンスに始まり、利用教育、相互利用、貸出・返却、閲覧環境の保持、そして蔵書や書架の管理に至る図書館のパブリックサービスすべてを監督しています。また、関西学院大学の学校図書館司書教諭資格科目、および同志社大学司書課程科目の講師を兼務しています。図書館界に身を置いて20年近くになり、司書課程とも深いつながりを持たせていただいておりますが、実は同志社大学在学時には司書課程科目は全く履修しておりませんでした。恥ずかしながら、文学部卒であるにも関わらず、学科が異なったこともあって、渡辺信一教授のお名前すら存じ上げませんでした。

このように同志社大生としては全く司書課程に縁がなかった私ですが、フルブライトプログラムでハワイ大学マノア校の図書館情報学大学院に留学中の1994年に、当時司書課程資料室などがあった臨光館で初めて渡辺先生にお目にかかりました。ハワイ大学ハミルトン図書館の日本研究ライブラリアンでいらした同志社OBの故・松井正人氏が、一時帰国する私にハワイ大学ライブラリースクールの大先輩でいらっしゃる渡辺先生を訪ねるように勧められたからです。渡辺先生は、司書課程出身ではない私を温かく迎えてくださいました。

ハワイ大学でMLISを取得して関西学院で大学図書館職員として働き始めてから、渡辺先生より司書課程が開催するさまざまな行事や図書館関係の会合などのご案内をいただくようになり、可能な限り出席させていただいております。そのような機会を通して、多くの図書館関係者、とりわけ同志社出身の方々と知り合えたことは、私にとって大きな財産となりました。また、渡辺先生のご厚意で『同志社大学図書館学年報』や『同志社図書館情報学』に拙文をたびたび掲載していただいたことが私の業績に大いにプラスとなり、大変感謝しております。さらに、2008年度から司書課程の1科目を教える機会にも恵まれて、後進の指導にもあたることができました。私が教えた学生の中から一人でも多く図書館界で働く人材を輩出できれば、これに勝る喜びはありません。

同志社在学中に司書課程を受講しなかったことを後悔しています（司書資格は他大学

の通信教育課程で取りました)が、卒業後数年を経てから司書課程コミュニティの末席に加えていただき、同志社出身の図書館関係者として活動しています。同志社司書課程が誇ることができるものの一つとして、図書館関係の仕事に従事しているOBのネットワークがあります。毎年春に開催される学生向けの「図書館ガイダンス」には大勢のOBの方々が手弁当で参加されて、学生に図書館で働くことの意義を語っておられます。このガイダンスに出席した学生が、その後数年して今度はOBとして話をする側になる——それこそ司書課程が長年にわたって築いてきた良き伝統であり、将来へと続くものだと思います。

これからの司書課程のますますの発展をお祈り申し上げます。

(うおずみ えいこ。関西学院大学図書館総合主管・同志社大学嘱託講師)

同志社での学びと絆

枝 元 益 祐

現在、京都外国語大学に職を得て丁度十年が過ぎようとしているが、その間、多くの非常勤で勉強をさせて頂き成長の機会を得たことは紛れもない事実である。これらの有意義な経験は偏に同志社の諸先輩方との関係性に依る処が大きいことは云うまでもなく、この同志社大学司書課程60周年記念の場を借りて改めて御礼申し上げたい。

そもそも枝元がこの業界に入る契機になったのは、渡辺信一先生の研究室を訪れた時から始まる。当時、総合政策科学研究科に属し行政の側面から教育を捉えようとしていた枝元の研究関心に真摯に耳を傾けて頂き、多岐に渡りご指導を頂戴した。その後、教育の側面から行政を捉え直そうと文学研究科教育学専攻へ所属を移行し渡辺信一先生のゼミで本格的にご指導を得ることとなった。今にして思えば、全く以て海の物とも山の物ともつかない枝元を快く受け入れて下さったことは恩謝の念が溢れるばかりである。

そこで学んだことは、今でも枝元の研究及び教育スタンスに大きく反映されている。それは上に記したように関係性の中からの学びであったと云うことが出来る。研究手法や学術理論を教わったに留まることなく、研究会での活動を通して多くのことを身体で以て学びとった。正に Lave と Wenger がその著書『正統的周辺参加者』で提示した「状況に埋め込まれた学習」そのものであったと思われる。

元来、育ちの良くない枝元の粗暴な振る舞いを温かく見守りながらも厳しく諫めて下さったことは、今でもその時の記憶がまるで映画のワンシーンを観るかのように甦る。決して優秀ではない枝元の将来を心配して下さり、在学中から非常勤で経験を積むよう進言して下さった。それには周囲から学生の分際で生意気だという声もあったと聞いているが、矢面に立って守って下さり、枝元を教壇に立たせて下さった。その時に渡辺信一先生から頂戴したプレゼントは、漢字の書き順も出鱈目であった枝元を思っただろう、中学生用の国語辞書であった。今でもその辞書は自分の研究室に大切に飾っている。そして行き詰まり立ち止まることがあると、その辞書を手に取り眺め、不出来な枝元を何とか鍛えようと尽力して下さったその思いに反することのないように方向修正をしてくれる人生に於ける羅針盤のようになっている。

勿論、渡辺信一先生からのみ支えられたわけではない。学部生時代から大城善盛先生はじめ多くの先生方に温かい支援で司書課程を無事に終えることが出来た。また、この60周年記念誌の執筆者でもあり、枝元と在学中に関わりのある人々とは当時、不安を共有し、大いに将来の夢や希望を語り合った仲間であり同志の一部の人々である。同時に御世話になった先輩方である。執筆者には含まれてはいないが、多くの先生方や仲間、そして先輩方と過ごした時間と空間がまさに学びの場であったと云うことが出来る。Gelpi が生涯学習を語る際に、「定められた時間と空間のみで学習が完結するわけではない」と措定しつつ、「生活の場」そのものが「学習の場」であり、「生活の中の経験」こそが学習のリソースだとしたことと符合する。

そういった人々との関係性は今も脈々と続いており、まるでフリン効果のように歳月を経る毎に確実にその経験や成長の蓄積を共有し同志社大学司書課程の伝統を受け継ぎつつも質を高めていると云うことが出来る。Gelpi に準えて云うなら在学中という「定められた時間と空間」のみで司書課程での学びが完結するのではなく、これをスタート地点として学び続ける生活の中にこそ、学びの真髄と成長があるのだと云うことが出来る。

十数年前には海の物とも山の物ともつかない、正に得体の知れない枝元であったが、同志社の人々に支えられて、今では「生活の中の経験」を通じて学びの活動のウィングを拡張している。またこのことは同時に、同志社大学司書課程の学びの構築へと円環し還元されていくものであると考えている。

(えだもと ますひろ。京都外国語大学外国語学部准教授)

司書課程との出会い ～一図書館員の歩み～

小 野 仁

私の図書館員としての歩みは、高校生時代、図書委員として学校図書館の手伝いをしていたことから始まる。図書館の落ち着いた知的な雰囲気になんとなく魅かれていた。無口な英語の先生が図書館の担当で、教員になって学校図書館を担当できたらと漠然と思うようになり、縁あって文学部教育学専攻に進学した。教育学専攻では司書課程科目も専門科目として履修することができ、渡辺信一先生、青木次彦先生と身近な先生方から講義を受けることができた。司書課程で特に影響を受けた授業は、当時京都大学から出講されていた森耕一先生の図書館学特論であった。メルヴィル・デュエイのコロンビア大学時代の活動の講義が特に印象に残っている。大学入学後に学校教育以外の幅広い領域を持つ社会教育に興味を持ち、森先生が大阪市立図書館長をされていたことを知り、なんとなく公立図書館員になってみたいとの想いを抱くようになっていた。

就職活動では出身地の市役所の人事課を訪問し、司書の採用を尋ねた。当時司書のあいまいな扱いは知る由も無かったが、行政職での受験を薦められ、幸いにも合格して図書館の配属となった。図書館員として最初に担当した仕事は、電算システムの管理であった。しかし、コンピュータに関する知識は、司書課程の図書館演習で原田隆史先生始め当時の院生の先輩方にパソコンの手ほどきを受けてきた程度で、知識・技術不足を痛感していた。地元で夜間課程を併設した専門学校ができることを知り、夜間の学生となり、自己研鑽を心掛けた。次に担当した仕事は、公立図書館発展の原点ともいえる移動図書館業務で、公立図書館の機能・使命を再認識させられ、公立図書館への想いをより強くしていった。

図書館員の仕事を続けていく中で、情報学にも興味が湧いてきた。さらに、米国の図書館員が図書館学校（大学院）修了者であることに刺激され、本格的に大学院で図書館情報学を学びたいとの想いを抱くようになった。母校を訪れた際に渡辺先生から大学院での図書館情報学の聴講生を薦められ、勤務する図書館の休館日の講義を登録し、単位を取得した。さらに、数年後に正科生として入学し、休日を利用して図書館情報学の大学院に通学した。在籍中に図書館から異動となり、一旦休学したが、時間をかけて修士論文を提出して修了した。生涯学習者としての道を開拓しているとの想いが支えとなった。

後年、社会教育課等の他部局の行政経験を積んで地元では最大規模の新図書館の開館準備の担当として、図書館現場に戻った。役に立つ図書館を目指して、開館に向けて資料収集や新たに開始するビジネス支援サービスの企画など開館準備を担当し、新図書館は開館した。新館が軌道に乗ってから、2館の地区図書館の館長を経て、現在、中央館で全館の管理面の仕事を担当している。愚直な生き方であるが、司書課程との出会いが、このような図書館員としての半生を導いてくれた。しかし、公立図書館は、貸出を重点サービスとして掲げて住民の身近な機関となった反面、限らない課題を抱え岐路に立っている。司書課程で影響を受けたデューイの今日で言うところの生涯学習の拠点としての公立図書館の理想を胸に、同志社図書館人としての誇りを持って、困難を乗り越えていきたい。

(おの ひとし。浜松市立中央図書館)

プログラミングも必修でした！

岸 本 博 子

— 「日本の図書館におけるコンピュータ・アプリケーションの展望について」 記述しなさい。 —

これは1979年の図書館・情報学Ⅰの試験問題です。ご担当は、今は亡き吉田貞夫先生。テキストはもちろん『コンピュータ・ベースの図書館システム入門』（L. A. Tedd 著 吉田貞夫 田口瑛子共訳 法律文化社 1979）です。この設問に対して、どのように解答したのか全く記憶にありませんが、三十数年を経た今も、この課題が有効であることに驚かされます。

当時、身近なコンピュータシステムといえば、銀行のオンラインシステムが稼働していたぐらい・・・。私は図書館とコンピュータがどう結びつくのか全くイメージできないダメ学生でしたが、吉田先生のご講義により、図書館業務におけるコンピュータ活用—その計り知れない可能性に目を開かされたのでした。

さらに、渡辺信一先生ご担当の図書館演習Ⅰでは、工学部生でいらした原田隆史先生が受講されていたこともあり、教室に「マイコン」数台を持ち込んでいただき、私たちは初めてコンピュータに直に触れる機会にも恵まれました。振り返ってみますと、当時

の私たちには最先端の勉強をさせてもらっている・・・という自負のようなものがあつたような気がします。コンピュータネットワークなど考えられもしなかった時代から劇的なITの進歩・・・。大きな変動にもひるむことなく「ついていく」ことができているのは、あのころの“自負”があるからこそと思える今日この頃です。

(きしもと ひろこ。滋賀県立図書館)

同志社大学司書課程での学び

北 口 己津子

同志社大学司書課程での学びは次の3つにまとめられる。一つは授業、友人、環境である。

まず授業である。当時は多くの課題に迫いまくられるという印象であったが、担当の先生方には、司書スピリットをご教授いただいた。司書ってそこまでやるの？かっこいい！それまでに感じていた司書という職業への考え方の転換であった。また同志社の司書課程は全学に開かれていたため、机をならべる受講者は幅広い専攻をもっていた。専攻を異とする受講者から受ける刺激も司書課程の授業を興味深いものにしていった。

次に友人である。司書課程ではボランティアというものがあつた。司書課程資料室の整理等のお手伝いということで、早速申し込んだ。実際は私にとっては10のうち8は友達づくりの場であり、2くらいはお手伝いできたであろうか？自分が読んだ本や少ない社会経験にたいして頭でっかちな夢や悩みを語ったりしていた。それは広いキャンパスで自分の居場所を見つけたという喜びでもあつた。学年が違ってなぜか話が合うと私を感じる友人が多かつた。また放課後の勉強会では、既に卒業して社会に出ている先輩と話ができる場でもあり、おおいに刺激をうけた。

最後に環境だ。やはり司書課程資料室の存在が大きかつた。資料室といいながら、その最大の特徴は「人」がいたということだ。珍しく人のいないときは、専門資料に囲まれてなんと落ち着いた時間を過ごしたものだつた。

そのすべてが同志社司書課程ならではのものであつたことは、卒業後に気づくのだから、なんと自分が恵まれていたかについてあつけにとられた。

さて現在の私の職業は、幸いにも夢みていた司書兼学内非常勤として司書課程にかか

わっている。同志社大学司書課程で自分が感じたいごちのよさ、それを学生や利用者
に与えられたらと日々自問自答である。

同志社大学司書課程での学びに感謝をこめて。

(きたぐち みつこ。尚綱大学図書館)

絵引き

小 出 いずみ

私が司書課程を受講したのは、大学院に入学した1975年からのこと、その頃は青木次彦
先生が主任をしておられた。当時は将来何を職業としていくか定まっておらず、所属の神
学研究科の勉強の他に英語の教職課程と司書課程を履修していた。アルバイトで生活を
支えていたので出席できる授業時間は限られており、夏期講習にも参加した記憶がある。

授業で索引について学んだ時のこと、「最近『絵引き』というものまで出てきた」
と青木先生が話されたのが、なぜか強く印象に残った。いまでも、デジタル資料であ
ればコンピュータでの検索によってある程度索引を代用することも可能であるが、その
ような技術が普及していなかった当時、情報検索は索引に大きく依存していた。「絵に
についても索引がある」というのは驚きであった。

その後、図書館の仕事はおもしろそうだと考え、さらに学ぶためにピッツバーグ大学
大学院図書館学科に留学した。入学願書に必要な書類を書いていた時、青木先生
が、大して熱心でもなかった学生が・・・と怪訝そうな、でも嬉しそうな面映い表情を
なさったのを覚えている。アメリカで学んだ時の様子は『図書館学年報』第7号に載っ
た。帰国後すぐに国際文化会館図書室に就職し、私のライブラリアン人生が始まった。

2003年に現在の職場に転職した。ここで、なんと「絵引き」を作ることになった。記
憶に残り続けた「絵引き」が、30年以上も経ってから自分の仕事になるとはまったく予
期していなかった。青木先生の言葉が予言のように思い出された。私たちが作成した「実
業史錦絵索引 <http://ebiki.jp/>」は、2009年度のグッドデザイン賞を受賞した。「司書」
の仕事のノウハウは、図書館の枠を越えて使える、と改めて思った。

(こいで いずみ。公益財団法人渋沢栄一記念財団 実業史研究情報センター長)

司書課程の思い出と今後への期待

小 村 愛 美

私にとって同志社大学司書課程での思い出は、やはり図書館ガイダンスです。学生のうちに、現役で働いておられる先輩方と会える機会は大変貴重なものでした。在学中・卒業後ともガイダンスで頂いた縁から人脈が広がっていますし、今も年に一度の大きな楽しみとなっています。

司書になって、講義と実際の業務は異なり、館種や規模によっても千差万別だと実感しました。しかし司書課程で学んだ知識は、確かに今の土台になっているとも感じています。

業務の中で基礎を学び直すことは難しいですが、特に情報リテラシーや電子資料、Webなどのトピックは、(程度の差はあれ)館種を問わずさらに重要になっていきます。それらを扱う知識や能力を、司書課程でできるだけ身につけられたらと思います。

また、学生が図書館界の動向に触れる機会も多く設けて欲しいと願っています。自分自身を振り返っても、学生の時は採用試験で手一杯だったとは思いますが、司書になってから何をするか、今注目されている話題は何で、どのような人材が求められているのか、そんな情報を聞いたり考えたりすることは大変重要です。図書館ガイダンスもその機会でしょうし、近年はメーリングリストでの情報交換が主体の気軽な研究会も増えています。司書課程の講義などで先生方から紹介していただいたり、私達卒業生も情報提供のお手伝いをするなど、それらの情報に触れる機会を作っていただければ、関心の高い学生には良い刺激になるのではないかと思います。

司書として同志社大学司書課程に育てていただいたこと、諸先生諸先輩方の御指導に感謝を申し上げます。今後も多くの人材が輩出されることを期待し、益々の御発展をお祈りしております。

(こむら いつみ。神戸大学附属図書館)

司書課程で学んだことと現在の仕事

瀬戸口 誠

大学で司書資格を取得した後、大学院で図書館学を専攻した筆者は、多くの先輩方とは少し異なった司書課程との関わりであったと思う。そのため、司書課程で学んだ図書館学と現在の仕事（教員）を関連づけて当時の思い出を記してみたいと思う。

筆者が司書課程で学んだ当時、渡辺先生と大城先生が専任教員として司書課程を担当されていた。お二人とも筆者の所属学科の先生でもいらっしゃった。そのような縁もあり、筆者にとって司書課程は大学入学当時から非常に身近な存在であり、司書課程履修も自然の成り行きだったと記憶している。当時の司書課程は、専任の先生方に加えて、伊藤昭治先生、阪田蓉子先生、山田泰詞先生といった方々が授業を担当されていた。先生方は、異口同音に「図書館学は実学であり、図書館現場との相互作用が重要である」ことをおっしゃっておられた。特に、伊藤昭治先生には、「図書館経営論」等の授業を通じて、専門職業人としての図書館員の姿勢を学ばせていただいた。時代によって図書館のサービス形態は多少変われども、業務に従事する図書館員の重要性は変わらない。

実際に自分が授業を教える立場になってみると、先生方の言葉が身に沁みる。ともすると、司書課程では、その科目の授業内容を全て説明できたかどうかばかりが気になり、単調な説明に終わってしまうことがある。ただ、図書館現場を常に意識することで、学生にとって、授業が単なる図書館の現状確認にとどまらないように思う。教員にとっても、図書館現場を中心に授業を展開することで、日々新たな発見が期待できる。こうした図書館現場を強く意識した授業への態度は、同志社の司書課程で学んだ大きな財産である。

(せとぐち まこと。梅花女子大学准教授)

同志社大学司書課程ボランティアとして

竹内 洋介

卒業後12年経ちますが、当時新町校舎の4階にあった司書課程資料室に足繁く通った日々のことは昨日のことにように思い出されます。専攻は教育学でなく文化史学だったのですが、まるでゼミ生のような顔をして入り浸っていた私を快く受け入れていただいていた渡辺信一先生には心から感謝しています。

「資料室ボランティア」といいながら、当番の時間以外にもほぼ入り浸るように資料室にいた私ですが、私は資料を目当てに通っていたのではなかったような気がします。勿論、図書館学の資料に関しては課程を履修している学生には十分すぎるほどの分量でありましたが、それよりも同じ司書を目指して勉強している同志に、資料室に行けば誰かしら会うことができる。その励みがなければ、今日こうして図書館の仕事をすることはできなかったであろうと思います。現に、その当時一緒にボランティアをしていたメンバーとは今でも図書館の業務や研修を通じて時々出会うことができますが、いつも話題に上がるのは決まってたった2年しかなかった資料室ボランティアのころの思い出話です。全国に散らばってはいますが、あの濃密なエネルギーをともに共有できた「仲間」がいる、という「横のつながり」に、館種を超えてホームカミングデーなどで繋がっていける「縦のつながり」こそが、私が同志社出身の司書として誇りうる財産だと思っております。

今まさに司書課程を履修しておられる学生さんたちが、一人でも多く私の感じたような同志社司書課程の恩恵に預かれるよう、願ってやみません。また、そのつながりの大樹が今後ますます枝葉を伸ばしてゆくことは勿論、私も枝葉のひとつとして恥ずかしくないような仕事をしていけるようお願いしたいと思います。

(たけうち ようすけ。富山県立図書館主任司書)

「思い出すこと」

竹 島 昭 雄

1974年3月に卒業し、4月から聴講生として司書課程を学んでから35年以上が経過しました。当時は青木先生や渡辺先生に教えを受け、とりわけ渡辺先生は同志社大学司書課程に赴任されたばかりだったと記憶するが、私の授業態度の悪さに大声でしかっていただいたことを思い出します。

しかし、こんな出来の悪い私に、図書館人としての道を歩む機会を与えていただいたのも、渡辺先生でした。「神戸市立東灘図書館でアルバイトを募集しているが、やりませんか」と声をかけていただいたのです。当時の私は親類の世話で通学しており、少し肩身の狭い思いをしていたので、お金がほしいというのが正直な気持ちでした。そこで、もう1人の学友と一緒に働くことになったのですが、この体験が図書館員として生きる道を決定づけました。

私の図書館員になるための基本は、この時のアルバイト体験と約2年間の臨時職員経験で培われました。「利用者を待たせない」「親切に対応する」「作業は迅速に行う」等、こうした姿勢の大切さを身をもって理解できたとともに、図書館とはこんなにやりがいのある職場だということを知ることができたのです。

今、学生に教える立場になって、自らの体験を少しでも伝えることができればと願うのですが、講義だけではよほど困難なことであります。図書館実習を必修科目とする同志社大学司書課程は、そうした意味でほんとうの図書館人を生み出すよき機会を与えていただいていると思います。「図書館学は実学である」ともいわれますが、今後とも学生達には図書館の現場を知ることができるよう、一層取り組んでいただくことを願うものであります。

(たけしま あきお。京都精華大学教員)

夜の今出川校舎で

田 中 健太郎

私は1983年から87年、司書課程にてお世話になりました。Ⅱ部学生でしたので、司書課程の授業も全て夜の今出川校舎で受講しました。最大でも10人程度、それは現在から考えれば、大変に贅沢なことでした。特に印象に残っているのが「参考調査演習」。当時、同志社大学附属図書館の閲覧課長でいらっしゃった服部純一先生（故人）に御担当頂き、学生は私一人。図書館のオフィスにお邪魔するなどして、参考調査の基礎をそれこそ手取り足取り教えて頂きました。思えば、図書館カウンターの裏側に入ったのはこの時が始めてでした。授業の後に二人で居酒屋へということもありました。

そのような究極の少人数教育のお陰をもって、卒業時に北海道大学附属図書館に職を得ることができました。幾つか候補の中で、寒い地方は嫌だなといった私に、「おまえアホか」と札幌行きを強く進めて下さったのは、大城善盛先生でした。北大附属図書館には9年間勤務、3課5係を経験し、最後の2年間は念願かなって参考調査カウンターに座ることもできました。

その後、縁あって文部省（当時）本省に異動することになりました。まったく異なるスピード感に大きな戸惑いがありましたが、主に国際交流関係の仕事が続けていく中で、国際機関（ユネスコ）への派遣も経験でき、新たな専門分野を作って参りました。

図書館の実務から離れてしまったことを、時に残念に思うことがありますが、司書課程や図書館勤務で学んだことが、業務上のある「センス」として、自分の持ち味となっているように思います。社会生活への出発点を作っていただいた、同志社大学司書課程の先生方に心から感謝いたします。

（たなか けんたろう。文化庁文化財部美術学芸課課長補佐（兼任）
国際文化財交流協力官）

司書課程の思い出など

田村俊明

大学の3回生になって、まだ卒業後どういう仕事をしたいのか何も決めていませんでしたが、在学中に何か資格を取っておこうと思い図書館司書を選んだのが、私の司書課程との出会いでした。法学部の学生だった私にとって、司書課程の講義は新鮮で興味深いものでした。それほど図書館の熱心な利用者ではなかった私ですが、図書館の歴史や役割、様々な図書館サービスの話を聞いているうちに図書館に対する興味が段々と深まっていき、4回生になった時には就職先として真剣に図書館を考えるようになりました。幸いにも採用試験に合格することができましたが、一方でもう少し図書館の勉強をやりたい気持ちもあり、内定をいただくまでの間、当時司書課程を担当されていた青木先生や渡辺先生に色々と相談に載っていただいたことを記憶しています。

社会人になってからは、図書館ガイダンスに参加させていただくことで、現役の学生さんたちや社会人としての先輩方など、様々な方たちと交流を持つことができました。自分が学生の時代にはこのような機会はなかったので、図書館ガイダンスに参加できる学生が羨ましくも感じたりしました。大学を卒業してもう25年以上の年月が過ぎましたが、司書課程を通じて知り合うことができた多くの方々は、私にとってかけがえのない存在です。司書課程が誕生して今年で60年ということですが、図書館員を目指す学生を養成する場であるとともに、卒業生を含めた図書館に関わる方々の交流の場として、これからも発展していただきたいと思います。

(たむら としあき。紀伊國屋書店)

図書館サービスの原点

田山健二

大学3年の春、きわめていい加減な気持ちで司書課程の履修登録を決めたときのこと

を、不思議と今も鮮明に覚えている。「図書館情報学」という科目名になぜか惹かれるものがあり、妙にその文字が輝いて見えたのだ。その後実際に講義を受けて、自分が図書館サービスをまったく知らないで20年間生きてきたことを知り、強い衝撃を受けた。そして同時に、日本のほとんどの人が真の図書館サービスを知らないのではないか、なんともったいないことだろう。そんな感想を持ったものだ。

実はそれが原点となって今の仕事に繋がっている。一人でも多くの人に本物の図書館サービスを知ってもらいたい、そういう思いで30年近く仕事をしてきた。しかしどうだろう、思い描いた理想の図書館サービスが日本中に行き渡っただろうか。世の中の急激な情報化のスピードに、図書館が取り残されてしまわないかと心配している。

こうした思いもあって、今年新しい事業を始めることにした。自治体史とそれに関連する歴史資料のプラットフォームシステムの事業化である。世間では電子書籍が徐々に定着しつつあるが、図書館はこの流れに乗じて、郷土資料にこそスポットを当てるべきだと考える。地域の歴史知識を共有化し、それを使って独自に発信していけば、きっとその町のファンが増えるはずだ。図書館が自治体組織の中で、地域活性化の先頭に立つ意義はきわめて大きい。それぞれの図書館のコレクションと最新のデジタル技術を融合させた、オリジナリティ溢れるサービスの展開のため、今ライブラリアンの知識と智恵が必要とされている。これからもみなさんのお役に立てるよう最善を尽くしたいと思っている。

(たやま けんじ。図書館流通センター)

「贅沢な苦痛」から生活者へ

東 條 文 規

私が司書課程を聴講したのは1973年と1974年、経済学研究科修士課程の2回生から3回生にかけてだった。

学部時代、講義に出るよりも、学生会館（現在では立派な寒梅館として建て直されている）2階の自治会室に居る方が多かった私は、最低限の単位を取って卒業したものの「大学」への未練が残った。「学問」の入り口ぐらいは見て置きたいと思って1年後、経済学の大学院に入った。幸い、指導教授の入江節次郎先生は可愛がってくれ、居心地

は悪くなかった。横文字を縦文字に直しただけのような修士論文を書き始めていたが、そのまま博士課程、研究者への道を目指そうとは思わなかった。大した才能もないし、「先生」にはなりたくなかった。少し格好よくいえば、いい年齢をしてふらふらしている「贅沢な苦痛」に厭きてきていた。

で、消去法的に「これなら折り合いが・・・」と思ったのが図書館の司書。「中小レポート」(1963年)も『市民の図書館』(1970年)も知らなかった。公共図書館にも行ったことがなかった。図書館には古い本がいっぱいあって、司書になれば、いつでもそんな本が読めて、時には郷土史家や文学好きと少しは知的な会話も出来て、などと考えていた。

司書資格が取ればいいと思っただけだから、聴講も熱心でなかったし、目録・分類も基礎的知識として一応学んでおくという感じだった。吉田貞夫先生が熱意を込めて語るコンピュータの講義は、図書館とどう関係するのかよく分からなかったし、青木次彦先生の図書館史もただ聴いているだけだった。

そんなとき、たぶん青木先生が講義の際に紹介されたと思うのだが、石井敦、前川恒雄『図書館の発見—市民の新しい権利—』(NHKブックス、1973年)に出会った。

冒頭の「日本に近代公共図書館が誕生して百年たった現在、やっと言葉の本当の意味での公共図書館が日本で育ち始めた」から、末尾の「図書館は結局、市民とオカミ・有識者の知識・情報水準を同じくするためにあるのである。だから、これは、坐っていて与えられるものではなく、静かなしかしねばりづよい闘いによって得られるものである」まで一気に読んだ。

ひとつ一つの活字が躍動し、著者の高い志が読み手に迫ってきた。一行また一行と畳みかけるような文体は一種の檄文といえるけれども、著者二人が現場の実践家として自信に満ちているのも気に入った。本の番人も悪くはないと考えていた図書館の仕事が、もう少し前向きなかたちで私の意識のなかに入ってきた。『図書館雑誌』を読むために日本図書館協会の会員になった。

しばらくして青木先生が、会員名簿を見たといって声を掛けてくれた。「もし、図書館で働く気があるのなら、香川県の四国学院大学の図書館が、少し外国語の出来る専任司書を募集していますよ。よかったですか。」と教えて下さった。公共図書館ではなかったが、居心地がよいのでそのままずっと讃岐の住人になった。「贅沢な苦痛」から生活者の道に導いてくれた司書課程に感謝している。

(とうじょう ふみのり。元四国学院大学図書館司書)

前非に悔悟す

徳 森 耕太郎

曲がりなりにも司書の端くれとして働く現在の姿を、司書課程で学んでいた頃の私が果たして想像することができたであろうか。いや、とてもできなかったに違いない。

3年次に多くの単位を落とし、4年次ものりくりと再受講。図書館実習では身の程知らずにも人気館ばかりを志望し、当然のようにあぶれる始末。当時演習をご担当くださっていた渡辺信一先生にとり、明らかに悪い意味で印象的な学生であったろう。

そんな私が、どういう訳か大阪府の司書採用一次試験にひっかかった。二次試験（口頭試問）を前に、途方に暮れた私の足が向いた先は、やはり司書課程資料室であった。藁をも掴む気持ちであった私に渡辺先生は、蓄積されていた先輩らの面接試験記をご提供くださったばかりか、大阪府現役司書の先輩に引き合わせてくださった。どうせ落とすなら一次試験にしてくれ、と半ば自暴自棄であった私に、どれだけ励みになったことか。こうして、偏に司書課程の助力により、現在の職にありついた。

しかし、生来の不勉強は必ず祟るものである。昨今の図書館現場には、多くの非常勤司書職員や委託業者司書職員の方々が勤務している。複数館の勤務経験を持ち、優秀な方も多い。精励な彼らに指導的立場で接せねばならない機会には、いつも冷や汗をかく。分類法は。目録規則は。著作権法は。どれも司書課程でみっちりご指導いただいた筈の事柄である。浅学を悔いてもはじまらぬ、再度勉強し直す毎日である。

現在在学生の諸賢には、伝統ある同志社大学図書館学徒の一員である誇りを持ち、しっかりと講義をものにしておくことをおススメする。

（とくもり こうたろう。大阪府立図書館）

今後の司書課程に期待すること

中 島 幸 子

私が同志社大学大学院文学研究科へ入学したのは、大学図書館員を退職して家事に専念していた2001年である。今でこそ現職図書館員が大学院に行き、より高度な知識を習得し、自らの研究テーマを持って研究することも可能になってきたが、私が勤めた私立の女子大学図書館では職員数も少なく、いろいろな業務をこなさなければならないため、勤務しながら大学院ということは考えられなかった。退職してから、自分の仕事についてももう少し理論的な裏付けがほしい、という気持ちで、渡辺信一先生、大城善盛先生のいらっしゃる同志社大学大学院を選んだ。

同志社ではその頃、新卒会という行事があり、3月に卒業する司書課程の学生を送る会で、OBもたくさん参加し、今でいうホームカミングも兼ねたにぎやかな集いであった。私は4月から修士課程に入学する直前の3月に渡辺先生からお誘いを受け、その会に出席させていただいた。各地の公共図書館に勤めるバリバリの現職図書館員の方が集まられて、卒業生に力強いエールが送られていた。初めて同志社の門をたたいた私は、司書課程の伝統を目の当たりにし、「図書館界に同志社あり」という強い印象を受けた。

私の仕事でいちばんの思い出は「図書館のコンピュータ化」である。ちょうど大学図書館が競って機械化を進めていた頃で、まず日常の業務分析から始め、業務のプログラミング、OPAC の設計などをするために、毎日、全員で勉強会をしたり、先行する図書館の実情を見学したりして、図書館システムを作り上げていった。

インターネットの利用も全く新しい体験で、今でもアメリカの大学から書誌データがイーサネットを通じて、MS-DOS の真っ黒な画面に送られてきたときの感動は忘れられない。すごいことができる時代になった、とこれからの図書館への期待が大きく膨らんだ。情報技術を駆使し、それまで受入や整理業務に費やしていた多くの時間や労力を、これからはレファレンスサービスや利用教育に使うことができる、と夢見ながらコンピュータ化を推し進めた。

ところが、コンピュータ導入は思わぬ状況を作り出した。正規図書館員が大幅に減って、契約や派遣の職員が過半数を占めるようになった。図書館員の仕事はルーチンでできることばかりと思われている、と、つい愚痴もいいたくなるような現状である。

図書館法の改正を受け、今年から司書課程のカリキュラムが変わり、大学の独自性を出すことも可能になった。先人が築いて来られた学問基盤と図書館界に輩出してきた豊

かなヒューマンリソースを活用して、より専門的な、実践的な能力を持つ図書館人を育成できる「同志社の司書課程」へと発展していくことを願ってやまない。

(なかじま さちこ。梅花女子大学)

同志社大学司書課程で得たこと

長尾典子

学芸員を目指し文化史学を専攻した筈の私が図書館の世界に足を踏み入れ、18年が経過しました。不思議なご縁を感じます。

司書を目指すきっかけとなった日のことは、鮮やかに記憶しています。3回生時に軽い気持ちで参加したホームカミングデー。司書の先輩方が語る現場の楽しさと緊張感、エネルギーを目の当たりにし、一生の仕事にしたいと強く思いました。その後本格的に受講を始めた図書館学の各講義において、先生方の経験に基づいた実践的な方法論を学んだことで、目標がより具体的になり、漠然としていた夢が、日を追って強い意志に醸成されていったように思います。

経験を得た今実感するのは、同志社大学司書課程は、他大学に比して、現場を知る百戦錬磨の諸先輩方が、後輩と講義やイベントなど様々な機会を通じて密に関わる場が豊富だったことです。先輩が道を示し、時に皆で背中を押してくださる恵まれた環境だったと思います。学生時、就職氷河期で正規司書職の求人が激減し焦っていた私に、先生が「諦めなければ大丈夫。大抵の受験者が求人倍率に恐れをなして諦めるから。意志を持ち続けられた奴が残る。がんばってごらん」と、耳打ちしてくださったことがありました。その言葉には、多数の司書を輩出した実績に基づくリアリティがあり、「気負いすぎず、あきらめない」人生の指針をいただいたと感謝しています。

その後私は採用された地方私立大学図書館を結婚のため離職、関東に居を移しました。委託化が著しい図書館業界で正職を得るのは厳しく、不安定な雇用で首をつなぎ、4年前に現職の専門図書館に有期ながらも正職同等の条件で採用され、なんとか今に至りません。

現在勤務する独法の研究所図書館は、歴史的にも図書館が研究と学習の中心と認知されている大学図書館と違い、厳しい予算縮減の中でシビアに切りしろを探す経営陣から

「図書館がなぜ要るの」と常に問われる環境です。客観性ある数値と実績で応えなければ図書館の存亡も危うい、厳しい条件です。また、更新保証のない有期雇用の日々は決して楽な日常ではありません。しかし、図書館の存在価値を高めアピールしていく方策を常に考え、努力が少しずつ形になり、ユーザーの信頼を得られた手ごたえを感じる時、やりがいを感じる日々を過ごしています。

昨今の図書館業界は、残念ながら現場で新人を育てる体力を失い、即戦力を安価に雇用し使い捨てる状況です。経験が待遇面で正当に評価されることのない現場で私自身も長年を過ごしてきました。若者が志向し難い業界の現状に、さみしさと責任を感じます。

富を直接生まない図書館を不要とする声に、どれだけ説得力のある説明ができるか、切実に問われている現状ですが、その答えは、現場にしかないと思います。実務者を多数輩出した同志社大学司書課程は、その答えをもっとも明確に示すことのできる学び舎だと思います。

今後のますますのご発展を心より祈念いたしております。

(ながお のりこ。(独) 海洋研究開発機構図書館)

巨大なる同志社司書課程連峰

中 村 健

司書課程60周年、お祝い申し上げます。

さて、大学時代の僕は、将来これほど図書館界に密接に関わるとは思っておりませんでした。その頃は専攻（文化史）の歴史学者になるのが夢で、「保暦間記」の勉強会や卒論の作成や論文を読むことに夢中になっていて、司書課程の授業は、女性が多く金曜日の夕方だったので、週末の息抜きでした。ただ、図書館にはよく通っていました。卒論を書く時期になると、書庫に入れるようになるのですが、書庫の中が楽しかったですね。アクロバティックな滝沢馬琴の小説の挿絵に興奮したり、戦前の資料に、内定先の会社情報が書いてあるのを見つけて、妙に安心したりと思い出がいろいろあります。あと、卒論作成にあたり、岡山に資料を見に行く必要があり、レファレンスカウンターで訪問利用の依頼をしたとき、海外旅行の申込をしたような特別な気分を味わいました。研究生活への切符を得た喜びです。感覚的に図書館と研究は僕の中で密接につながって

いました。しかし、まさか、自分が将来、大学図書館で働くとは夢にも思っていませんでしたから、あまり司書も司書課程も意識しない不真面目な学生でした。今も、仕事中に偶然、見つけた面白そうな資料を読むため、終業後、書庫に籠もることがありますが、三つ子の魂百までですね。そして、この「利用」感覚が僕の司書感覚の根底のひとつにあります。

司書課程を強く意識したのは、卒業をして数年後の「転職」活動のときです。そのとき、転職の選択肢になぜか「司書」が浮かんできました。大学時代のイメージが強く残っていたんですね。さて、ここからその凄さを実感していきます。渡辺先生に御相談に伺ったところ、大変、暖かく御親切に指導いただいたうえ、水曜日の夜に開催される試験対策の勉強会を教えていただき、ごく自然に司書課程と関われるようにしていただいたのです。とにかく転職の機会を探していた私にとって、これほど「ありがたい」場所はありませんでした。さらに、就職して分かったのですが、図書館界における同志社出身者の人脈は高く遥か遠くまで連なっており、素晴らしい先輩がたばかりで、ますます畏敬の念を深めていきました。大阪市立大学にも数名いらして、仕事を始めたころの安心感になりました。図書館の仕事は、人脈作りが非常に大切で、みなネットワーク作りに苦勞するのですが、同志社のネットワークは強固で広いので、スタートから大きなアドバンテージです。近年、大学図書館界でも司書の採用が減ってきておりますが、毎年合格者を輩出し、このネットワークの更新をおこなっていることはすごいことです。

これほどお世話になった同志社司書課程に期待する点です。メタデータ、ラーニングコモンズ、ディスカバリーサービスなど新しい概念が出てきています。こうした新しいことが重要なのは言うまでもないですが、同時に、プリント版の図書館、また図書館界で連綿と伝えられてきた技術もますます大切になります。温故知新、両面を知り、初めて知識は生きるように思います。同志社大学司書課程の伝統と人脈によってならば、学生にこの両方を伝えることが可能だと思いますので、期待しております。

(なかむら たけし。大阪市立大学学術情報総合センター職員)

司書課程への思い

中 村 保 彦

「そうか、もう60周年になるのか」。とはいえ、私が受講していたのは、その半ばぐらいの時期。亡くなられた青木次彦先生が『同志社大学図書館学年報』に「司書課程30年史史料」を連載されていた時期だった。因みに、この「史料」は、図書館史の史料としても貴重だし、単独の大学司書課程の記録としても他大学に類を見ない稀有なものだ。

受講当時の記憶は様々ある。一つあげるとするなら、松居直氏（当時、福音館書店会長）の絵本に関する講演が印象に残っている。1984年5月14日ホームカミングデー、神学館チャペルに於ける講演だ（内容は『同志社大学図書館学年報』11号に収録されている）。同志社に入って「占領軍とは異なるアメリカ」に会ったときのカルチャーショック。学生を大事に（甘やかすとは違って）扱ってくれた学風。大学は「学生を大事に育てる教育機関なのだ」という当り前のことが、実践し続けるとなると難しい。大学図書館界に働き、利用教育を担当する司書としていつも痛感している。また、「三度々々の飯は食わせるが小遣いはあまりやれない」といわれたにも拘わらず、魅かれて入った石川県の小売書店、福音館のこと。「大きな会社に入っても面白くありません。小さな処に入って苦勞していろいろやることが面白い」と松居氏がいわれたのをなぜか覚えている。そして、現在の福音館につながる絵本の話。

講演を聞いたとき、修士論文のテーマに「コミュニケーション史」を考えて、あれこれ模索していたことと不思議につながる何かを発見した。それは「言葉は、心に残ります」といわれたことだった。絵本は、「大人－絵本－子ども」という関係のなかに存在し、絵本を読む際の耳から聞く言葉、喜びと楽しみを伴って受け止めた言葉が心に残るのだと。これは、言葉を単なる情報伝達的手段とだけ考える浅薄なコミュニケーション理論と全く異なる言語観だと判った。偶然とはいえ、絵本論の講演から修士論文のテーマと根底においてつながる考え方に遭遇し嬉しかった。学生を大事に育て続け60周年を迎える司書課程の更なる発展を期待しています。

（なかむら やすひこ。文教大学湘南図書館司書）

同志社大学司書課程の誇るべき点

西 尾 恵 一

現在、私が図書館の世界に身を置いているのは、同志社の司書課程で学んでいなければあり得なかつただろう。元々、在学中には司書課程を受講していなかった。資格を取得しようと思ったのも、卒業はしたものの就職先が決まっていなかったのも、とりあえず資格の一つでもという程度の気持ちだった。

そんな私が図書館で働くことができたのは、多くのOBのお力添えのおかげである。その一例として、資格取得後間もない頃に資料室へ顔を出した時に、その当時非常勤講師で来られていた伊藤昭治さんに図書館でのアルバイトを探していると話したところ、すぐにその場で電話をしてくださった。それまでほとんど話をしたことがなかったのだが、快く引き受けてくださったのが強く印象に残っている。また、現在に至るまで伊藤さんを始め、多くの諸先輩、後輩の方々から同志社卒ということで親しくさせていただいている。

同志社大学司書課程の一番誇るべき点は、世代を超えた人のつながりではないかと思う。単に資格を取得するための講義を行うだけでなく、図書館ガイダンスやホームカミングデー等で、在学生とOB、もしくはOB同士が接する機会を設けてくださることにより、司書課程受講者としての一体感が生まれているのではないのだろうか。今でも事あるごとに声をかけていただき大変感謝している。

今も私にとって司書課程資料室は、訪れるたびに実家に帰ってきたような安らぎを感じる。これからも居心地のいい司書課程であり続けてほしいと切に願う。

(にしお けいいち。大阪府立中央図書館)

司書課程受講の思い出

西尾純子

私が在学当時の思い出と言えば、4回生で受講した、青木次彦先生のレファレンスサービス演習が真っ先に思い出される。その当時、今出川キャンパスの図書館の3階にある部屋で、青木先生が様々なレファレンス資料を見せながら解説しておられた様子が浮かんでくる。先生の解説をお聞きした後、実際に図書館のフロアへ下りて行き、各自が情報探索を行う。決められた時刻になると、また部屋に戻って、それぞれが自分の調べた結果を発表し、青木先生のレビューをお聞きして終わる、という授業であった。

実は、この演習の前の講時には、私の所属する学科では新町キャンパスでゼミの授業があった。ゼミ終了の後、大半の学生は教室から移動して喫茶店でお茶を飲みながら、授業の続きを話し合う。これに参加できないのは、正直に言うと当時結構つらかった。私はといえば、短い休み時間に、荷物を持って新町から今出川へ大急ぎで移動し、授業開始のチャイムと同時に教室へ滑り込んでいった。何度レファレンスサービス演習をサボろうかと思ったことか。しかし、青木先生の穏やかかつ熱意のこもったご授業と、クラスメートの笑顔のお陰で、なんとか持ち堪えて卒業を迎えた。

なんとこの我慢(?)が、卒業してから役に立ったのである。私の就職したアメリカンセンターの図書室では、アメリカ合衆国の資料を揃えていたため、学んだことをすぐに実践という具合にはいかなかったが、レファレンスサービスを行う際の基本姿勢が大変役に立った。もちろん、レファレンスサービス演習以外の授業で学んだことも、就職後いろいろと役立ったのは言うまでもない。社会に出てから、同志社大学出身の先輩にお会いすることも多く、誇りを持って業務につくことができた。

もうひとつの思い出は、正式名称を忘れてしまったのだが、同輩の岡野英彦さんがつくられた、同志社を出て図書館に興味を持ってはるひとの会であった。当時、たまたま同級生だったのでなんとなく入れていただいたのだが、これが単なる親睦会ではなかった。現在、同志社大学で教鞭を執っておられる原田隆史先生のような先輩をはじめとして、同輩や後輩が集まり、図書館の現在・未来について熱く語り合った記憶がある。また、後輩の職場の悩み相談に、先輩がアドバイスをしている姿があった。あれは司書課程の“*One purpose*”の象徴だったのだろうか…。

最近では、2010年11月に、同志社大学図書館からお招きいただき、「米国政府情報の検索」に関して、大学院生、大学生、図書館の方々を対象にワークショップの講師を務

めさせていただいたことがある。懐かしい今出川キャンパスや図書館を拝見して、在学当時のことを思い出した。その頃と比べて、図書館の資料がデジタル化するなど変化したところはあるが、基本的にはあの時のままであった。

これからも、多くの学生さんがこの司書課程で学び、図書館員として巣立っていかれるのであろう。在学中に学んだことは将来、必ず役に立つ時が来る。同志社大学の司書課程の卒業生には素晴らしい先輩方がたくさんおられるので、誇りを持って仕事に就いてほしいと思う。同志社大学司書課程の益々の発展を心より願ってやまない。

(にしお じゅんこ。元・関西アメリカンセンター図書室勤務、
現在・図書館情報学非常勤講師)

卒業生からのことば

野間口 真 裕

このたびは同志社大学司書課程60周年誠にありがとうございます。様々な時代の変化の中、今日の発展を築き上げられましたことに敬意を表しますとともに、心よりお喜び申し上げます。

私が司書課程を受講したのは平成14年より3年間でしたので、もう10年も前になります。当時、渡辺信一先生、大城善盛先生、伊藤昭治先生、村上泰子先生などたくさんの先生方の講義や演習を受講させていただいたことを今でも思い出されます。

また、同志社大学には司書課程資料室という特別な部屋があったことが印象に残っています。渡辺先生が図書館学の文献を所蔵している資料室のボランティアとして開室や簡単な配架などをおこなうスタッフを募集しておられ、開室のお手伝いをしながら図書館学の文献を読んだり、各種課題をしたり、ボランティアや有志で図書館司書を目指す勉強会をおこなったりしたことは今でも大きな財産となっています。

就職してみてもわかりましたが大学図書館は図書館の過去・現在・未来を本当に感じ取れる職場だということです。インキュブラから最新の電子ジャーナル・電子ブックまであらゆる資料、文化情報資源を扱うことになりますが、これらを扱う知識は図書館司書課程によって学んだことだと断言できます。司書課程は公共図書館寄りの科目ですが、決して大学図書館で役にたたないものではありませんでした。また、同じく司書課程か

ら大学図書館に就職された方や国立国会図書館、専門図書館などに就職された方にお話を伺うことができるネットワークも非常に心強いことでした。現在でも上司に先輩に同期に団体の委員などさまざまな場所で同志社のつながりに感謝しながら仕事させていただいています。

今後とも司書課程は同志社大学より図書館の現場へ学生を送り出すそのトレーニングとサポートをおこっただけだと切に願っています。その結果が二重・三重のネットワークになり、卒業生ひいては同志社大学司書課程の発展に寄与していくものと期待しています。

(のまぐち まさひろ。京都大学経済学研究科・経済学部図書室)

同志社大学司書課程60周年の御祝いを 申上げるがため所感を謹んで述べる

松 田 泰 代

インターネットの出現によって世の中は大きく変化し、いまもなお変化しつづけている。そして、われわれの脳も思考方法も、扱う道具によって変化している。

このことは、ニコラス・カーが“The shallows: what the internet is doing to our brains”（邦訳『ネット・バカ』）で指摘している。彼は、ニーチェ自身がペンからタイプライターを使うようになって文体が変化したと感じたこと、そして「執筆の道具は、われわれの思考に参加する」と述べていることをこの本で紹介した。同じような事例として、姉崎正治も毛筆からペンに持ち替えたことによる文体の変化をのべている。

では、紙媒体の本から電子媒体の本への移行によって、読書はどのように変化し、脳はどのような機能変化をおこすのだろうか。携帯小説の出現や Twitter の出現によって、その世界では文章は短文化され、分断され、流れるような滔々とした文体は減少しているように感じる。逆に、そのような短文化された文体でないと、受け入れられにくくなり、滔々とした文体は読む訓練がなされていないことから、意味を解釈しづらいという理由で読まれなくなる可能性が、近未来においておこるのではないだろうか。読書の分断が起こり得ると推量する。

人類の財産でもあるすばらしい古典作品が読まれなくなるという事態を防ぐためにも、

紙媒体の本も電子媒体の本も読めるような環境を維持し、脳を鍛えることが重要かもしれない。インターネットの出現は、知を障壁から解放したが、脳の変化というパラドックスも秘めている。

このように変化しつづける世の中であって、図書館で必要とされる技術は現在から近未来に向かって変化するであろうし、また、過去から現在においても変化し続けてきた。技術はどんどん新しい技術に置き換わっていくが、その根本にある図書館の使命や理念といった精神の部分は進化するとはあっても、風化することはない。また、アメリカ図書館協会の「図書館に関する権利宣言」や日本図書館協会の「図書館の自由に関する宣言」、「図書館員の倫理綱領」から示される精神、則ち、「図書館の自由」という言葉で代表される知的自由や利用者のプライバシー保護、図書館の価値中立性、そして研修につとめる責任など、その精神は大切に守らなければならないと考える。

私は、同志社大学の司書課程で、モダン（その時点での最先端）な図書館における技術と共に、これらのもっとも大切なライブラリアン・シップを青木次彦先生、渡辺信一先生の両先生から授けていただいたことに感謝している。また、新島襄の精神が語り継がれている同志社大学で学べたことは、人格形成の面において自律した精神を身につけられ、ありがたく感じている。そしてそれは何よりも同志社大学からの贈り物である。感謝の念をもって、同志社大学司書課程60周年の御祝いを謹んで申し上げたい。

（まつだ やすよ。山口大学大学院人文科学研究科准教授）

集まる場所としての司書課程資料室

柳 勝 文

集まる場所という観点から司書課程資料室のことを書きます。第1に研究会や研究会など多くの会合が司書課程資料室で開かれたこと、第2に卒業生など年代を超えたつながりがあること、第3に意外な出会いのあるところ、と思いつくままに書きます。

第1は諸会合の会場です。日本図書館研究会の図書館学教育研究グループは1987年に活動を再開し、90年代後半に私が参加し始めたときには司書課程資料室が研究例会の会場でした。コピー機が室内にあり、必要な資料をその場ですぐにつくることができました。新幹線で来る方々にも京都駅から地下鉄ですぐという便利な立地です。当時は建て替え

る前の臨光館の3階にあり、大小2つの部屋が中で往来できるようドアがありました。大きい教室は30名を超える会合でも窮屈な思いをしませんでした。臨光館の建て替えにより尋真館1階に移り、渡辺信一先生が定年退職され内装が改造される過程で、例会開催が困難になり近くの公共施設（現在の継志館）や佛教大学などを使ったりするなど紆余曲折がありましたが、宇治郷先生のご配慮で現在は司書課程資料室で研究例会をしています。同志社大学学校図書館学研究会は学校図書館現場の職員や研究者などが発表・調査・翻訳などに90年代後半から取り組みました。当初は少人数だったこともあり、渡辺先生の研究室（徳照館）や同館の会議室などを使っていましたが、やがて臨光館3階の司書課程資料室に集まるようになりました。平日の仕事のあとの集まりでは近くの松之家さんが資料室まで出前をしてくれました。会合としては他に日本図書館学会（当時）の関西懇話会（？）も何度か開かれました。会合のあとは近くの居酒屋「林」が良心的な値段と臨機応変の対応で参加者を迎えてくれました。他に今出川校地では、日本図書館情報学会の研究集会や研究大会、日本図書館文化史研究会の研究大会、京都図書館大会などが開かれました。

第2の年代を超えたつながりでは、図書館界などで活躍する卒業生のネットワークを使って講演会や東京地区図書館見学会（1泊2日）など多様に展開していますが、特筆すべきは司書課程ガイダンス（春の連休期間）です。多様な現場で活躍する卒業生が仕事の内容や就職活動など生の声を聞くことができますが、居酒屋「林」での二次会ではざくばらんな対話が卒業生同士や現役生のあいだでできる貴重な機会だと思います。そのためにも卒業生名簿を整備することは大切と思いました。さらには、複数の図書館見学などのあと新卒会という集まりが年度末に新卒生や非常勤講師などを招いて開かれました。

第3の意外な出会いでは、用事のために資料室へ行くと、卒業生や図書館関係者などさまざまな人々に出会うことができました。同じ大学から巣立っても随分と多様な人々になっていくのだなあと感心したものです。

なお、勉強会には参加しなかったため書きませんでした。司書課程資料室は、平日の早朝から夕方まで、たいていは開いていて渡辺先生が歓迎して下さいました。

（やなぎ かつふみ。龍谷大学文学部准教授、
95院アメリカ研究科博士課程前期課程修了）

司書課程資料室で学んだこと

依 田 紀 久

「お昼でも食べにこないかね？」

2001年4月、本当なら卒業していたはずの春。私はまだ大学に居座っていた。ふとしたことから1年間のワーキングホリデーを決心し、大学を休学してオーストラリアを旅した。帰ってきた私は、所属のゼミもなく、社会とのつながりもなく、孤独に就職活動でもするのか、とぼんやり考えていた。出国前に司書課程資料室でお世話になっていたこともあり、帰国後、当時資料室を取り仕切られていた渡辺信一先生にご挨拶に伺った。先生は、オーストラリアで牛に追いかけられた話などに笑ってくださった。それ以来時々、朝早くにお電話をくださり、お昼に誘ってくださった。自転車で今出川の弁当屋でとり弁を買い、それを持って資料室に行った。資料室は、当時の私にとって、先生や友人と会話を楽しみつつ専門領域の資料に触れることのできる「居場所」となり、また「研究室」となった。多くの時間をそこで過ごした。

近頃「ラーニングコモンズ」という言葉が、大学図書館界で議論されている。学生が滞在し、学び、創造する空間を作ろうというものである。情報通信環境を整え、豊富な学術情報に居ながらにしてアクセスでき、スキャナや可動式の机と椅子など、共同創作に必要なツールが用意されている。インフォメーションコモンズという言葉もあり、時に両者は同義的に使用されるが、私はラーニングコモンズという言葉の方を好んでいる。なぜなら、そこには、「会話」が感じられるからだ。図書館の中に集まった学生同士の会話がある。そこにいる学生とネットの向こう側にいる学生との間の会話がある。図書館に所蔵されている豊富な資料に記録された先人の知識を巡っての会話があり、インターネット上に次々とアップされていく情報を巡っての会話がある。資料に困ったときには図書館員との会話があり、課題に行き詰った時には教員たちとの会話がある。会話こそがラーニングコモンズの本質だと思っている。

今、海外の多くの大学図書館が、ラーニングコモンズのコセプトを受容し、実現している。学生たちがリラックスしながら創造的な時間を過ごせるよう、コーヒーショップを設けている。学生に座席から気軽に話しかけてもらえよう、オンラインチャットを

開いている。学生がチャットにアクセスすると、こんな会話が生まれる。「今は、図書館の中?」「そう。閲覧室奥のソファのところ。4人のグループ。コーヒー飲みながら課題をやってる。」「私はレファレンスカウンターにいるわ。見える?」「あ、見える。」「今空いているから、データベースの使い方を案内するわ。いらっしゃい。」「じゃあ、いくね。」

はやりものと言われたりもするラーニングcommonsだが、私には、その姿が司書課程資料室の思い出と重なる。あの頃の資料室にはインターネットはなかったが、学ぶための会話が生み出される場所だった。今、図書館員となり、自分の原風景とも言える記憶に照らして、ラーニングcommonsをごく自然な図書館の姿と受け取っている。そして記憶に照らしつつ、図書館が、変わり続ける環境の中どうあるべきかを問い続けている。図書館の本質を考えるための基礎地を獲得するのが司書課程の時間であるとするならば、私は、司書課程資料室で過ごした時間から考えるための多くの視座を得たように思う。そのすべての始まりは、思えば、電話越しの会話から始まっていた。「お昼でも食べにこないかね?」

(よだ のりひさ。国立国会図書館関西館)

